



沖縄陸軍病院「南風原壕群20号」見学の様子。
米軍による火炎放射器で焼かれた跡が生々しく残っています。

沖縄陸軍病院の概要

沖縄陸軍病院(球18803部隊)は1944(昭和19)年5月に熊本で第32軍の陸軍病院として編成され、6月から那覇市内で活動を始めましたが、同年10月10日に米軍の空襲で施設が焼失し、南風原国民学校校舎に移転しました。それ以降、第32軍野戦築城隊の指導のもとで、喜屋武(黄金森)と兼城(現在の役場北側の丘)に約30の横穴壕が造られます。

米軍の艦砲射撃が始まった1945(昭和20)年3月下旬には、陸軍病院は各壕へと移り、広池文吉病院長以下、軍医、看護婦、衛生兵ら約350人に加えて、3月24日には沖縄師範学校女子部・県立第一高等女学校の生徒(ひめゆり学徒)222人が教師18人に引率され、看護補助要員として動員されました。

4月1日の米軍上陸後、外傷患者の激増に対応する為、外科を第一外科、内科を第二外科、伝染病科を第三外科へと改め、5月下旬には第32軍司令部は摩文仁(糸満市)への撤退が決定し、沖縄陸軍病院にも撤退命令が出されました。その際、重傷患者には青酸カリが配られ、自決の強要が行われました。

撤退後、治療活動は停止状態となり、将校以外の軍医や衛生兵は他の前線部隊に配置替えとなりました。病院本部は山城、第一外科と第三外科は伊原、第二外科は糸洲の自然壕になります。

山城の本部壕や伊原第一外科壕入口は爆撃され、糸洲第二外科壕や伊原第三外科壕は馬乗り攻撃にあって、多数の死傷者を出し、6月18日、広池文吉病院院長が直撃弾を受けて戦死し、沖縄陸軍病院は解散することになりました。

南風原町は1990(平成2)年、戦争の悲惨さを伝える証として、第一外科壕群・第二外科壕群を町の文化財(史跡)に指定しました。



撤退時に土の中に隠したと思われる医療薬品と顕微鏡が壕内に残っています。



現在の「飯あげの道」は平和学習のコースとしても整備され使われています。
右の写真は「飯あげの道」に行く姿を再現したマネキン(南風原文化センター内展示)



南風原文化センターの展示室には当時の壕内の様子が再現されている。幅90cmの棚が2段あり、入院患者のベッドして使われていた。



臭いも証言の一つとして、「壕内臭気」を公開(証言を元に当時の壕内の臭いを再現)。血やうみ、体臭や排せつ物などが混じった強烈な臭いだったとされ、鼻を突く悪臭に吐き気をもよおす劣悪な環境だった事を追体験できます。(壕入り口受け付けで体験可能)

飯あげの道

「命懸けで食糧を運ぶ過酷な道」

沖縄陸軍病院壕への食糧(おにぎり)や水の運搬は看護補助要員に動員されたひめゆり学徒隊の仕事でした。黄金森(こがねもり)を登り、さらに下って現在の南風原文化センターの西側横を通り、集落の中にある炊事場までの約450mの道のりを「飯上げの道」と呼び、梅雨時の雨でぬかるんだ泥道を大量の砲弾が降り注ぐ中、2人ひと組で醤油樽に詰めた食糧を担いで運搬する命がけの過酷な作業でした。

運搬中に砲弾の土埃が樽に入り、中のおにぎりに土が混じった為「土が混じってガリガリしている」「量が少ない」と患者から文句を言われたそうです。

この「飯あげの道」も戦争当時を追体験できる場所として、病院壕と共に平和学習に活用されています。

足手まといになる重傷兵は死を強要された

証言

青酸カリを混ぜたミルク

師範本科1年第二外科勤務 津波古 ヒサ 『ひめゆり平和祈念資料館 ガイドブック (展示証言)』

壕の奥にはランプが灯り、重傷患者がうめいています。「学生さーん、水下さい」と弱々しい声で叫んでいるのです。ためらっていたら4、5人の衛生兵が入って来て、そこらの空缶を集め、木箱の上に並べ、練乳缶を開けて中に水を足しています。「お手伝いしましょうか」とかけ寄りました。そしたら凄い表情で私をにらんで、「まだいたのか。今頃そんな所にいたらたっ斬るぞ。敵はそこまで来ているんだ。何しているか」と怒鳴ったのです。私は壕入口に後ずさりしました。衛生兵は私たちに背を向け、ミルクを調合し、両手に4、5個ずつ持って壕の奥や横壕に入って行きました。壕内はシーンとしていましたが、しばらくすると急に興奮した叫び声が響いたのですよ。「これでも人間か。お前達のやることは」両足切断の患者がうめいているんです。衛生兵はその患者を引きずって奥の方へつれて行きました。ミルクには青酸カリが入っていると気づいて騒ぎだしたのだと思います。

証言

異常な感覚が胃袋に走った

第一外科入院患者 岡 襄 『南風原町史第3巻 戦争編ダイジェスト版 南風原が語る沖縄戦』

青酸カリが配られたのは5月28日のことだ。衛生兵が来てミルクの配給があるから、入れ物を出せと言うので、私も飯盒のフタを出して置いた。壕の入り口の方からミルクが配られると、入り口の方で大きな声で騒いでいるのが聞こえた。喜んで騒いでいるのだと思った。そして、自分の所にもミルクがきた。ちょっとなめると非常に苦かったので、ナゲーラ壕で看護婦さんがくれた黒砂糖を飯盒の縁で削ってミルクに混ぜた。「まだ苦いな」と、隣にいた北海道出身の兵隊と二人で話しながら、「もうこれくらいいいやろ」と一気に飲み干した。そしたら目がグワーツとちらついてきて、息苦しくて、胃の中が煮えくりかえる感じがした。「こりゃ毒や」と気づくと、水筒の水を飲み、指を突っ込んで吐いた。2～3回繰り返した。北海道の兵隊さんにも吐かせた。他の患者は一気飲みしたのか、始めは苦しんでいたようだが、もうシーンと静かになっていた。「殺される」と思った瞬間、不思議な事にそれまで動けなかった体で立っていた。走り出した途端、後ろから「コラー、誰だ、逃げるのは一っ」と怒鳴られ、ピストルの音が何発も聞こえた、壕は真っ暗なので当たらず逃げる事ができたが、北海道の兵隊は山川橋200～300メートル前まで行ったら艦砲射撃に吹っ飛ばされてしまった。



津波古ヒサさん(故人)は「戦争の悲惨さ、愚かさ、そして命の尊さを後世に伝え残したい」という強い思いで証言活動を行ってきました。
(ひめゆり平和祈念資料館 第2展示室)



「南風原陸軍病院壕跡」碑

「重傷患者二千余名自決之地」と刻まれているが、2000余名は南風原壕群の収容人数であり、青酸カリによって殺害された人数は不明である。

南風原平和ガイドの会

●第36回琉球新報活動賞
社会活動部門受賞(2014年)

2007(平成19)年6月18日の20号壕公開に伴って、4月に結成したのが南風原平和ガイドの会です。第1回養成講座の受講生を募集したところ、定員の3倍にあたる町内外の60名が応募するという、関心の高さが伺い知れました。これまで10回養成講座を開催し、現在は約60名が、陸軍病院壕を通して戦争の悲惨さや平和と命の尊さを伝えるという大きな使命を持って、壕のガイドを担っています。

町内各字の歴史や文化、見どころをまとめた字マップや黄金森周辺の戦跡マップ等を作成し、町の観光事業にも大きな役割を果たしています。



各字ごとにガイドマップも作成し「南風原文化センター」や隣接する「はえばる観光案内所」で入手できます。

沖縄陸軍病院南風原壕群20号 見学希望の方へ

■個人および団体とも予約制 ■見学は有料(要確認)

■公開時間 ▶ 9:00～17:00(見学受付は16:30まで)

■休 壕 日 ▶ 毎週水曜日 12月29日～1月3日

●一度に入る人数は10名以内 ●常駐ガイドによる案内
●ヘルメット&懐中電灯(現場無料貸出) ●見学時間約20分程度



問い合わせ・予約

南風原平和ガイドの会
(南風原町立南風原文化センター内)

☎ 098(889) 7399